初恋相手はオトコの娘!?～小悪魔系オトコの娘の甘い罠♡～

- 目次

１章　初恋
２章　初体験
３章　初穴挿入

【第一章】初恋

「……すっ、好きです！　ぼ、ぼくと付きあってください！！」

思春期真っ盛り、とよく言われる〇学三年生の春、二鳥真琴(にとりまこと)ははじめて一目惚れというものを経験した。それは電車内での出会いだった。

今までのマコトの人生の中でみたことがないほど可愛らしい、他校の制服を着た少女がマコトの目の前に立っていた。

ハーフなのか、ブロンドヘアーにツインテールの髪型。凛(りん)と整ったきれいな顔立ちに、小柄でスレンダーな体型。半袖の白いブラウスの中に収まれている胸はだいぶ小さめだが、

スラッとした長い手首と、赤いスカートの中に隠れていてもわかる桃のような見事なお尻、瑞々しいふとももが、もう胸などどうでもいいくらいマコトの瞳を魅了した。

　まるで彼女は、絵本の中から出てきた中世のお姫様のようだった。彼女の姿をマコトは、電車内で何度も見かけていたが、奥手な彼は、話しかけることも、勇気を振りしぼって告白に至ることもできずにいた。

　しかし、今日麗らかな春の朝。彼はついに駅のホームで大胆にも彼女への告白を成功させた。

「……うーん、キミ結構好みの顔つきだし、付き合ってもいいんだけど……」

蒼空のように蒼い瞳で、じっとマコトを見つめた後、少女は困惑の色を浮かべながらちいさく口を開いた。

「ボク、〝オトコの娘〟なんだけれど、それでもいいかな？」

「……へっ？」

（……ボク？……”オトコ”の子!?）

一瞬、マコトの理解は遅れた。“少女”。ではなく“少年”。の容姿はどうみても女の子だったからだ。胸はたしかに……。失礼ながらもマコトはそう思った。が、それでも実は男の子でした！　と言われても、

（ぼくと付き合うのが嫌で冗談を言ってるのかな？）

としかマコトには考えられない。

「あははっ、付き合うなんてむりでしょ？　オトコの娘となんて……。こんな格好しているボクが悪いんだけどね……、ええっと、それじゃあ……ね」

「まっ、まって！　ムリじゃないよ。たとえ君がオトコの子だろうと、ぼくは……ぼくは、君のことが好きなんだ！　毎日電車の中で見つめてしまうほど、君のことが大好きなんだあぁぁっ！！」

（ああ、人混みがあふれかえっている駅のホームの中、ぼくは何を大声で口走っているんだろう……）

マコトはすこし我に返ってそう思う。しかし、そのおかげで彼は、少女に対する恋心は本物であったこと。恋焦がれて、少女のすがたを毎日脳裏に浮かべていたことを思い出す。

（そうさ、性別なんて大した壁じゃない……！）

「……本当に？」

少し戸惑いながらも疑うような上目遣いで、少女はマコトをじっと見つめる。頬はほんのり蒸気を帯びていた。

「う、うん！」
「ボク“おちんちん”付いてるよ？」
（お、おち、おちんちん!?）鼓動が早まる。見た目はカンペキ美少女な子が、そんな卑猥な言葉を口にするなんてマコトは夢にも思っていなかった。
「……それでもいいの？」
「そ、それでもっ!!　……す、好きで、すっ……」
マコトの声が途中でしりすぼんだ。大声で告白してしまったせいか、駅内にいる人々から自分たちが注目を浴びていることに気がついたからだ。ギャル風の女子高生・まじめそうなサラリーマン・野次馬が好きだと目で語る太ったオバサン。様々な人物が遠目で、マコトたちを見つめていた。
『奥さま。オトコの娘ですって』
『まあっ、今流行の!?』
などと驚く主婦たちの会話がちらほら、マコトたちの耳に入っていた。
「え、えーと……こ、こっち、一緒にきて!!」
がっしりと、少女はマコトの手を握った。どうやら注目を浴びていることに少女もまた気づいたようだ。繋いだ手の温かみを感じながらマコトは、引っぱられるままに駅の出口のほうへと走って行った。

◇　◇　◇

駅の出口に到着した。
「……はぁ、はぁ……」走り疲れ、少女は喘ぎ喘ぎに息をする。「ねえ……そういえばキミ名前なんていうの？」少女の体からは、だくだくと滝のように汗が流れ出ていた。首もとにたらりと汗がなまめかしく通り、マコトはその汗の流れ行く先をひそかにそっと目で追いかけつつ、いまさらな質問の返事をかえす。
「はぁっ……はぁっ。に、二鳥真琴です」
「へぇ、マコトかぁ。いい名前だね♪　ボクは妹に尾って書いて、妹尾佑樹よろしくね！」
（ゆうきちゃん、かあ。可愛い名前だなぁ）
『ざわ……ざわ……』
いやな視線を肌で感じるマコト。どうやら、二人はまだ目立っているようだ。
手をつないだまま初対面のように自己紹介を交わす初々しい二人。

　しかも片方は、振りかえり見てしまうレベルの金髪ツインテール美少女だ。目立たないほうがおかしいとも言えるだろう。
「あはは。こんなところで自己紹介しあうのもなんかおかしいね。うーん、こうなったら……こっちきて！」
またぐいぐいとユウキはマコトを引っ張っていく。
「……とうちゃーく！」
数分走り、駅の裏にあるうす暗い路地に到着した。
こんな所に好きこのんでやって来る人はそういないだろうなー。
初恋相手と狭い空間に二人っきり。マコトはキョロキョロと辺りを見回して、あがる気持ちを落ちつかせようとする。
「ここ、穴場なんだ……」後ろから。マコトの耳元にするりと少女のなまめかしいクチビルがちかづく。「めったに人は通らないし、建物の死角の位置にあるからたまたま見られることもなくて、頻繁に電車が通るから防音対策もカンペキなんだよ」
ひそひそとささやくように、ユウキは路地のおおまかな説明をする。
「へぇー、それならなにしたって大丈夫だね！」
「そう、ナニしたってだいじょうぶ……」
艶めかしい美少女（♂）の体が、マコトの上半身に密着してきた。桃のようなふわりと甘い香りが鼻腔をくすぐった。
「……たとえば、こんなコトしても……むぎゅっ！」

「うわっ……!?　に、にぎって、ゆうきちゃんが、ぼ、ぼくのおちんちん……！」

「にぎって欲しそうに、ズボンにテントを張っていたのは、どこのだれかなぁ？」

においを嗅いだ時点で、すでにあそこは熱くなっていた。握られ擦られ、マコトのテントは張り裂けんばかりに膨らんでいる。

「あっ、うっっ！　ちゃ、チャックおろしちゃ……」

「苦しそうだから、だして、あ・げ・る♡」

膨らみで、前三角形に変形しているズボンのチャックを、少女は無邪気に手で下ろす。

　ズボンの中に収まっていた熱いたぎりが、そびえ立つ大山のごとくデカデカと外にあらわれる。

「きゃっ！　おっきぃ。ビクビクしてるぅ。あはっ。先っぽからカウパーがどんどん溢れてきて、……ザーメン、いっぱい出したいの？　なで、なで」

硬く反り返った肉竿の先端を、紅葉のような手のひらでユウキはなでなでと撫でる。

「うあっ。そんな柔らかい手で撫でまわされたら、ぼく、もう……っ！」

「えっ、なぁに？　なで、なで」

大量にでるカウパーがローションのかわりとなり、人肌の温かい手で撫でられるたびにクチュクチュと卑猥な音が路地に鳴りひびく。

「うぅっ！　もう、で、でちゃうぅぅ……っ！」

溜まりに溜まった熱くて白い液体が、ドプドプと少女の手のひらの中で爆ぜた。

「……あっ、ザーメン、手の中にいっぱいあふれて……」

男の手とは思えない細くツヤツヤした手に、イカくさいにおいの液体がたっぷり付着していく。

その汚れた手を、少女はまるで宝物を見つけたかのような爛々とした瞳で見つめている。

匂いを味わうように数秒経ったあと、楽しそうに見つめつつ彼女は、白濁液で汚れた手を口もとへ持っていく。

「……くんくん。んんっ、すごいイカくさぁい……んっ、ちゅっ、れろっ、ぢゅっぢゅぅ」

ためらうことなく舌をベロリとだし、少女は濃厚でプリプリの子種を舐めだした。

「……ん、れろ、れろ。じゅちゅッ、ちゅちゅッ!!」

　ベロリと出した舌は、下顎に届くぐらい細長かかった。その舌が、手のひらをナメクジのようにぺちゃぺちゃと這って舐める姿は、妖艶かつエロティックな光景で、マコトは一寸たりとも目を離せなかった。

「ぐちゅ、ぐちゅぐちゅ、んぇ……」

飲みこまず、口のなかでミキサーのように泡立てた白濁液。それを右手の平にユウキはぺっと吐きだす。

「……んふふっ、溜まってたの？　すごいたっぷり、見て、どろッどろッだよ……」

泡立った白濁液がのった右手を上にあげ、爪先からひだり手にその液体を、ユウキは魅せるようにだらだらと垂らした。

（そんな、キラキラした目でぼくのザーメンを見てくれるなんて……）

射精したばかりの肉棒が、さっきよりも硬くなっていることにマコトは気がついた。

「うふふっ……じゃあ一番搾りのミルクいただくね……んちゅっ、じゅる、ぢゅるりっ、じゅりゅうぅぅ!!」

初めて耳朶に触れるじゅるじゅると子種を啜る音はひどく卑猥で、触られてもいないのにまた射精してしまいそうになるほどマコトは自身の肉竿を肥大させる。

「……ごくッゴクッ……ごくっ……」

両目を強くつぶり、身体をふるわせながらゴクゴクとユウキは子種を飲み込んでいく。

どろどろねばねばの液体は、しつこく喉に絡まるらしく、すこし苦しげな悩ましい顔でユウキはその搾りたての液体を飲み下す。

そんな煽情的な姿を魅せられ、マコトはいつのまにか、彼女の喉の動きと合わせるように生唾を飲み込んでいた。

人体から出る白くて苦い大人のヨーグルト。その塊をどんな気もちで彼女は飲みこむのか……。

未知の心境を想像で埋めることは不可能だ。心臓が、どくどくと早鐘を打つのをマコトは抑えることができない。

「……ごく……ごくん！……ふうっ、ごちそうさま♪」

屈託のない笑顔をユウキはマコトに向けた。

その笑顔を見たマコトは、もう少女がオトコの子だとかはどうでもよく、ユウキそのものが好きなんだと、彼女の痴態に酔いしれて恋していた。

製品版に続く～